

# 「皇位継承」議論百出 関連シンポ

大嘗祭おほなむらひまつりなど天皇陛下の即位に伴う行事が続いた今月、京都市内で天皇制をテーマにしたシンポジウムが相次いだ。9日に京都府立京都学・歴史館（左京区）で「皇位継承」をテーマとした国際日本文化研究センター（日文研）の特別公開シンポジウム、10日には京都大人文科学研究所（左京区）で研究会「現場から考える天皇制」が開かれ、研究者らが制度としての天皇制を考察した。共通して話題となったのは、皇位継承儀礼をどう考えるかだ。

日文研のジョン・ブリン教授（日本近代史）は、継承に際し天皇が天照大神や皇霊への礼拝を繰り返す行為は明治維新後に始まったと指摘。大嘗祭には新政府の指導層が参列し、「明治天皇は一連の儀礼の場で天照大神とのこれまでにない関係を構築し、そこには政治的、公的な性格も付与された」と説明した。戦後、天皇が象徴となった後も「儀礼の場で万世一系のフィクションを権威づけることが続いている」と話した。

京都大の集会では、高木博志教授

## 現在の儀礼は明治から／史実と神話 峻別を

（日本近代史）が、観光のために史実より「神話」など物語が優先される近年の傾向に言及。皇位継承に際して天皇陛下らが参拝した神武天皇陵（奈良県橿原市）が「1863年に作られた架空の墓」であり、大嘗祭の本質も「新天皇が瓊瓊杵尊あまのむすひのみこととして生まれ変わることにある」と説明し、「非合理的な神話を必要とするのは、天皇制が民主主義の原理と矛盾する非合理的な制度だから。戦後、神話と史実を峻別することから始まった歴史学が、学問的に問い続けることが必要だ」と力を込めた。

欧州王室との比較も。日文研のシンポでは関東学院大の君塚直隆教授（ヨーロッパ国際政治史）が、上皇陛下の退位についてのおことは（2016年8月）に関し、「長年の友人でもあるオランダのベアトリックス前女王がヒデオメッセージで退位の意向を示したことが示唆を与えているのでは」と指摘。

また、欧州各国では20世紀末ごろから、性別にかかわらず第1子が優先的に王位を継承する規定に変わってきた流れを紹介した。【花澤茂人】